山口大学教育学部研究論叢　第68巻　23頁～26頁　2019年1月

児童生徒や教員に求められる社会的コンピテンス

沖林　洋平

Social Competencies Required for Students and Teachers

OKIBAYASHI Yohei

（Received September 28, 2018）

はじめに

キー・コンピテンシーという用語は，OECD（Organization for Economic Co-operation and Development；経済開発協力機構）のDeSeCo（Definition and Selection of Competencies:Theoretical and Conceptual Foundations）プロジェクトにおいて提案されたものである。文部科学省は，「「キー・コンピテンシー」とは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、１．人生の成功や社会の発展にとって有益、２．さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、３．特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの。個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略。」と定義している（文部科学省，2005）。

DeSeCoの報告に基づいて，文部科学省が定義しているキー・コンピテンシーの具体的な内容は次のように設定されている。１．社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）２．多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）３．自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）である。この中の１では，知識や情報を活用する能力，（PCやインターネットなどの）テクノロジーを活用する能力に関係する。２では，他人と円滑に人間関係を構築する能力（共感する力，感情をコントロールする力），利害の対立を御し，解決する能力に関係する。３では，人生設計や個人の計画を作り実行する能力，権利，利害，責任，限界，ニーズを表面する能力に関係する。「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（中央教育審議会，2015）では，改訂後の学習指導要領の実施には，教員には，子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することにより，子供たちがこうした学びを経験しながら，自信を育み必要な資質能力を身に付けていくことができるようにする（文部科学省，2014）ために，次の３点に集約される資質・能力を有することが求められるとしている。ⅰ）習得・活用・探究という学習プロセスの中で，問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。ⅱ）他者との協働や外界との相互作用を通じて，自らの考えを広げ深める，対話的な学びの過程が実現できているかどうか。ⅲ）子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み，自らの学習活動を振り返って次につなげる，主体的な学びの過程が実現できているかどうか。この３つの観点を見ると，キー・コンピテンシーに関連した特徴によって構成されていることが分かる。ⅰはリテラシーや問題解決能力など，認知的能力に関すること，ⅱは他者との相互作用なコミュニケーションに関すること，ⅲはキャリア形成につながる自律的な学習行動の促進に関することである。以上を踏まえると，いわゆる我が国の現代的教育課題に関する課題解決能力は，文部科学省がまとめているキー・コンピテンシーの枠組みによって解釈することもできる。

児童生徒のキー・コンピテンシー

教育に関する現代的課題の課題解決に求められる資質・能力としてキー・コンピテンシーが挙げられること，文部科学省が提案するキー・コンピテンシーには３つの特徴があることを確認した。このような特徴をもつコンピテンシーの測定的観点について先行研究に基づいて検討する。Waters（1983）は，コンピテンスは動機づけや知性，信念に基づく意思決定について検討する上で重要であることを主張している。また，コンピテンスにの測定において，能力やスキルの特定性に基づいてコンピテンスを定義することが，コンピテンスの概念の統合性を失うことに繋がったことを指摘している。そのうえで，発達的視点がコンピテンス評価において重要であること

を指摘した。Waters（1983）は，コンピテンスを発達的な視点に基づいてアセスメントすることを指摘している。また，理論的モデルとアセスメントが調整されていることが，例えばコンピテンスのような社会性の発達に関するデータは年齢や行動の領域に強く一貫することを示した。Waters（1983）は，コンピテンスにおける発達的観点の重要性を指摘したが，幼児期から青年期を対象とした先行研究において，コンピテンスあるいはコンピテンシーの内容については学習行動に関連するものや集団における相互作用に関連するものなど多様である。例えば，小林（1993）は幼児の対人葛藤場面をにおける幼児の言語反応によって対人行動としての社会的コンピテンスを検討した。あるいは，東・野辺地（1992）は，幼児を対象に，社会的問題を表した図（社会的葛藤場面）を見せ，それに対する言語的反応を分類することで，幼児の社会的問題に対する問題解決能力しての社会的コンピテンスを測定している。このように，幼児期の社会的コンピテンスは，その社会的問題に対する解決能力としての側面が強調される。幼児期は，就学前教育の時期に対応し，家族以外の社会的相互作用を経験する端緒であるといえる。そのため，この時期の発達段階において新たに獲得する能力しての社会的問題解決能力（東・野辺地，1992；林，2012；小林，1993；柴田，1995）の重要性が指摘される。

児童期における社会的コンピテンスにおいては，学習に関する行動や動機づけが注目される。野崎（2003）は，中学生を対象に，達成目標とシャイネスが学習に関する他者への援助行動傾向に及ぼす影響について検討した。その結果，教師と友人に対する援助行動は社会的コンピテンスを起点として学業的援助要請への態度に異なる影響を与えるモデルを示すことを明らかにした。あるいは中谷（1998）は，小学５，６年生を対照として，社会的責任目標や学業的援助希求や学業コンピテンスが学業成績に及ぼす影響について検討している。その結果，学業コンピテンスは社会的責任目標と学業成績の両方と有意な相関を示すことを明らかにした。あるいは，社会的な学習行動の機能として，岡田（2008）は，中学生を対象として，友人関係への動機づけ，学習への動機づけ，友人との学習活動の関係，充実感について検討した。その結果，友人関係への動機づけが援助要請や相互学習を媒介として友人に対する充実感や学習に対する充実感に影響を及ぼすことを明らかにした。以上の研究は，学習に関する行動に対しても，友人関係や社会的責任に対する意識といった社会的コンピテンスが学習行動に影響することを示している。すなわち，児童生徒の学習行動に対する意識を高めるためには，児童生徒の友人関係への動機づけや適切な援助要請能力，あるいは社会的期待に対する自覚などの社会的コンピテンスを高めることも求められる。

児童生徒の技術的ツールに関する教育効果について，原田・勝沼・久野（2014）は，小学校教育におけるコンピュータプログラミング教育の介入効果と評価を行っている。児童に対するインタビューの結果，１．コンピュータをブラックボックスではなく自力で面白いものが作れるように認識するようになったこと，２プログラミング上の様々な技を進んで教え合うことで，協同的にプログラミングの技術を高めたり，プログラミングの考え方を深めることを示した。中澤・荒本・後藤・平澤（2016）は，小学生を対象に，プログラミングに関する教育ツールの利用効果について検討した。Learning Analiticsとして，小学生の編集中のプログラムを10秒ごとに自動保存して学習履歴を可視化するプログラムを用いた。その結果，教員の意図した順序とは異なる想定でプログラムをくみ上げていた小学生が約３分の１程度であったことを明らかにした。あるいは，久野（2016）は，近年のプログラミング教育の理念が，単なる技能の習得から学習者が自分で考える，自分で調べることへとシフトしていると述べている。また，プログラミング教育の目標は学習者の離陸にあるとしている。これは，自分の手でコードを書いて動かし，結果を見て手直しできるようになることであり，自分で手直しできることが自分でコードを改良していけることに繋がると述べている。自分でコードを改良していく過程は，自己調整学習の過程に対応する。自己調整学習とは，学習者が，メタ認知，動機づけ，行動において，自分自身の学習過程に能動的に関与する学習であるとされる。自己調整学習の過程では，「自己システムのプロセス（主体としてのプロセス）」には、自己覚知、自己省察、自己評価といった「思考や経験についての思考」に関するメタ認知的ないし高次のプロセスが含まれるとされている（伊藤，2009）。自己調整学習における自律的に学び続ける過程については，21世紀型能力（国立教育政策研究所，2013），21世紀市民リテラシーといった，今後市民に求められるコンピテンシーに対応する。

教員にもとめられるコンピテンシー

本論文では，文部科学省が提案したキー・コンピテンシーの内容について，発達的視点の重要性を踏まえ，幼児期や児童期におけるコンピテンスについて先行研究を概観した。児童生徒に対して教育的に関係する教員に求められる社会的コンピテンスについて概観する。

Selvi（2007）は，英語の語学教員に求められるキー・コンピテンシーとして，言語学的能力，音韻的能力，文法的能力，コミュニケーション能力，数的能力，情報処理能力によって構成されると主張している。

Selvi（2010）は，教員に求められるコンピテンシーの全体的は枠組みとして，学習能力，カリキュラム能力，研究能力，生涯にわたる学習能力，社会文化的能力，情動知能，コミュニケーション能力，情報処理や技術能力（ICT），環境能力によって構成されるとした。Kanning, Bottcher, Hermann（2012）は，教員に求められる社会的資質・能力（Social Competence）を，交社会性，挑戦的動機づけ，自己に対する自信，教育に対数るレディネスなど10の下位因子によって構成されることを示した。これら研究は，教員に求められるコンピテンシーは，言語能力や数的能力のような認知的能力だけでなく，コミュニケーション能力や協働能力やプレッシャー下での職務能力など情動知能にかかわるような機能によって構成されることがわかる。すなたち，教員の資質・能力について，コンピテンシーの観点から考えた場合，いわゆる専門の教科に関する授業技術だけでなく，児童生徒や同僚とのコミュニケーション能力や情動知能の向上が求められる。

Hakin（2015）は，教員の教育学的，人格的，職業的及び社会的コンピテンシーが教員としての力量形成に及ぼす影響について検討した。その結果，４つのコンピテンシーそれぞれが教員としての力量形成に影響を及ぼすことを明らかにした。また，教員のパフォーマンスを高めることは，教材の習熟度を高めること，学習のマネジメント力を高めることだけでなく，学習環境を楽しいものにすることや児童生徒が学習に高い動機づけを示すような，児童生徒の学習活動の方向付けとガイドにおける心理学的関与の重要性を指摘している。このように，教員に求められるコンピテンシーには，専門領域に関する教育技術に関する能力だけでなく児童生徒や同僚などとの相互作用に関する能力も含まれると考えられる。

近年，社会的コンピテンシーが関係する新たな領域として注目されるようになっているのが，いわゆるソーシャルネットワークの利用である。専門職における職業的なソーシャルネットワークの利用における協同的コンピテンシーの機能について，Benson & Filippaios（2017）は，MBA修了者を対象とした調査を行った結果，性別とソーシャルネットワーク利用には関係がない一方で，ソーシャルネットワーク利用の増加と将来の雇用者が自分のアカウント情報に関して何を見つけるかを心配したり，ソーシャルネットワークの利用に対する潜在的な依存を心配していることが関連することが明らかとなった。入学準備期間からそれ以降のライフサイクルで，多くの学生はソーシャルネットワークを協同的な知識共有のために利用する（Benson, Morgan, & Tennakoon, 2011）。知識マネジメントの研究では，ビジネスの成功のために知識共有における柔軟性と協同能力の重要性が示されている（Lytras & Ordóñez de Pablos, 2008）。その一方で，過度の使用による依存は利用者の自信を失わせたり，対面コミュニケーションスキルを低下させたり人間関係を壊したりすることも明らかにされている（Salehan & Negahban, 2013）。ソーシャルネットワークの適切な利用については，児童生徒の情報モラル意識や適切なインターネット利用スキルの育成に関する関心の高まりから，教材開発や授業内容の改善など，情報モラルに関する専門的な指導技術に対する関心は高いが，教員の過度なソーシャルネットワークの利用などの心理的影響も検討する必要がある。

教員に求められるコンピテンシーとして社会性と情動の学習（Social and Emotional Learning; SEL）に関する能力を挙げる研究もある。Collie, Shapka, Perry & Martin（2015）は，教員のSELに対する信念を類型化し，ストレスや仕事の満足度との関連を検討した。SEL快適性，SEL関与，SEL文化によって構成されるSEL信念尺度（Brackett, 2012；Collie, 2012）を用いて，教員約1800名を対象とした調査が行われた。その結果，教員のSELに関する信念のクラスタとして，SELadvocate（提唱者），SELsstriver（努力者），SELthriver（推進者）が見出された。この３つのクラスタとストレス，仕事満足度との関連を検討したところ，SELthriverは他のクラスタよりもストレスが低く，仕事満足度が高いという結果を得た。SELthriverの特徴としては，SELに対する信念が全体的にバランスよく高く，とりわけSEL文化に対して高い意識を示している。SEL文化に含まれる項目としては，自校の文化は児童の社会性と情動スキルの発達を支援している，というような項目であり，学校におけるSEL学習の定着度に対する理解を測定しているともいえる。また，自分ひとりの取り組みだけでなく，学校としての取り組みに対する意識を尋ねているとも考えられる。Collis et al.（2012）は，教員のストレスを低減させたりや仕事満足度を高めたりするコンピテンシーとして，例えばSELのような心理教育に対する理解が求められるが，チームとして心理教育的取組を行っていることに対する意識も重要であることを示唆する。

Prasetcharoensuk, Somprach, & Ngang（2015）は，タイの教員と児童を対象として，教員のコンピテンシーが児童生徒のライフスキルの習得に及ぼす影響について検討している。その結果，まず，教員のコンピテンシーと児童生徒のスキルは高い水準にあること，次に，教員のコンピテンシーはカリキュラムや学習マネジメントに対してポジティブに影響することを示した。Prasetcharoensuk, Somprach, & Ngang（2015）は，教員のコンピテンシーを高めることが，教員としてのカリキュラムマネジメントや授業力を高めること，そして，

児童生徒のライフスキルを高めることを示唆している。

引用文献

東敦子・野辺地正之　（1992）．幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究―けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス―　教育心理学研究，40，64－72.

Benson, V., & Filippaios, F. (2015). Collaborative competencies in professional social networking: Are students short changed by curriculum in business education? *Computers in Human Beavior*, 51, 1331-1339.

Brackett., M. A., Reyes, M. R., Rivers, S. E., Elbertson., & Salovey, P. (2012). Assessing Teachers' Beliefs About Socialand Emotional Learning. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 30, 219–236.

Collie, R. J., Shapka, J. D., & Perry, N. E. (2012). School Climate and Social–Emotional Learning: Predicting Teacher Stress, Job Satisfaction, and Teaching Efficacy. *Journal of Educational Psychology*, 104, 1189 –1204.

Collie, R. J., Shapka, J.D., Perry, N. E., & Martin, A.J. (2015). Teachers' beliefs about social-emotional learning: Identifying teacher profiles and their relations with job stress and satisfaction. *Learning and Instruction*, 39, 148-157.

Hakim, A. (2015). Contribution of Competence Teacher (Pedagogical, Personality, Professional Competence and Social) On the Performance of Learning. *The International Jojuranal of Engineering and Science*. 4, 1-12.

原田康徳・勝沼奈緒美・久野靖　（2014）．公立小学校の課外活動における非専門家によるプログラミング教育　情報処理学会論文誌，55，1765－1777.

林創　（2012）．人の行為の良い悪いのとらえ方　林創・清水由紀（編）　他者とかかわる心の発達心理学　金子書房, pp.75-92.

伊藤崇達　（2009）．『自己調整学習の成立過程』　北大路書房.

Kanning, U, P., Bottcher, W., & Herrmann, C. (2012). Measuring social competencies in the teaching profession—development of a self-assessment procedure. *Journal of Educational Research Online*, 4 (1), 140-154.

小林真　（1993）．幼児の対人葛藤場面における社会的コンピテンスの研究―人形を用いた実演反応と言語反応による測定―　教育心理学研究，41，183－191.

国立教育政策研究所　（2013）．社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理

久野靖　（2016）．プログラミング教育/学習の理念・特質・目標　情報処理，57，340-343.

文部科学省（2005）．OECDにおける「キー・コンピテンシー」について　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryo/attach/1402980.htm 2018年9月28日

中沢真・荒本道隆・後藤正幸・平澤茂一　（2016）．編集履歴可視化システムを用いたLearning Analytics ～ Scratchを用いた初等教育向けプログラミング教育における学習者の思考パターン分析　情報処理学会第78回全国大会論文集，4－531－4－532.

中谷素之　（1998）．教室における児童の社会的責任目標と学習行動，学業達成の関連　教育心理学研究，46，291－299.

野崎秀正　（2003）．生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響　教育心理学研究，51，141－153.

岡田涼　（2008）．友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究　教育心理学研究，56，14－22.

Prasertcharoensuka,T., Somprachb,K-L., & Ngang, T, K. (2015). Influence of Teacher Competency Factors and Students' Life Skills on Learning Achievement. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, 186, 566 – 572.

Rogers, E. (1995). Diffusion of innovations. New York: Simon & Schuster. Pp.37-50.

Selvi, K. "The English language teachers' competencies, presented paper. *The Fifth International JTET Conference*. Hungary: The Conference conducted at the meeting the University of. Debrecen. 2007: P.1-10.

Selvi, K. (2010). Teachers' Competencies Cultura. *International Journal of Philosophy of Culture and Axiology*, vol. VII, 167-175.

柴田利男　（1995）．仲間との対人経験が幼児の社会的コンピテンスに及ぼす影響　教育心理学研究，43，85－91.

Waters, E., & Sroufe, L. A. (1983). Social competence as a developmental construct. *Developmental Review*, 3, 79-97.

山口大学・山口県教育委員会　（2018）．教職大学院「地域科目」と「ちゃぶ台ミドルリーダー養成プログラム」の融合・相乗による課題解決力向上プログラム